

---

# 近江の将

三雲 釈至道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

近江の将

### 【Nコード】

N7629M

### 【作者名】

三雲 釈至道

### 【あらすじ】

応仁の乱よりのち、室町幕府の権威は地に落ちた。

明応二年、管領であった細川政元は將軍の廃立を行うべく明応の政変を実行。これにより実権は細川氏に移った。しかし政元の死後、細川氏は分裂し、中央の求心力は無きに等しくなった。これを機に各地の豪族、国人が力を蓄え、泥沼化した戦国時代が本格的に幕を開けたのであった。

大永元年、近江の六角氏本拠、観音寺城内の館で一人の男児が誕生した。彼は乱世ゆえに生れて直ぐに決められたのである。「近江の

将」となることを…

## 誕生（前書き）

この小説を読むにあたってのお願いとお断りです。

私は小説に関しては、完全なド素人です。ですから、作品は小説にうるさい方から見れば駄作だと思います。駄作は読んでも時間の無駄だ！と思われる方は読まれない方が良いと思います。それでも読んで頂けた方は、是非、アドバイスなど遠慮なくお書きください！どんな意見でも嬉しいですよ^^

## 誕生

春の暖かな風が戸を外した場所から吹き入り、部屋にある掛け軸を揺らすと向かいの開けた戸へぬけてゆく。その風にあたりながら、部屋の真ん中では二人の男が碁を打っていた。一人は中年で、歳の割には痩せて老けている。それに対してもう一人は、十代半ばと思われる若々しい青年である。

「強くなつたな」

中年の男が一手打ち、満足そうに言った。

「そう言いながらも勝ちますよね、父上は」

微妙な笑みを浮かべながら、青年の方が参りましたの仕草をみせ言った。どうやら碁の勝負がつき、中年の男が勝負を制したようだ。

「誰がワシより強くなつたと言った？強くなつた、と言つたのだ」

大きく笑いながら中年の男が言った。青年の方はからかわれた気がして、何か言い返そうとし口を少し開けたが、上手く言葉が出なかった。その表情に中年の男は気づいたが、無視して立ち上がると風の入ってくる縁側に立った。

「しかし、早いな」

縁側に立った中年の男が言った。

「何がです？」

青年の方が碁石を片づけながら言葉を返した。中年の男は青年の問いに答えず、黙って縁側から見える春の景色をぼんやりと眺め、遠い昔のことを思い出しはじめた。

「殿、殿！？どこに居られますか？」

後藤賢豊が叫びながら、必死になって廊下を走り、首を忙しく左右に動かしている。

「まったく、これだから困るんだ！」

かなり苛立った表情を見せながら一人で言葉を吐き捨てると、再び廊下を駆けだした。今の賢豊は殿を探す事しか頭にない。

賢豊がしばらく廊下を駆け続けていると、お蔵に繋がる廊下の所で殿がうろろしているのが見えた。

「殿！早く！」

賢豊は主徒の関係など忘れ殿の元に駆け寄ると、強引に手を掴み、もと来た廊下を戻り始めた。しばらく廊下を駆け、ようやく殿を呉服前の所へ連れてきた頃には既に事は終わっていた。賢豊は間に合わなかったことを気にして視線を少し落とした。

「おーーーーー！私の子だ！」

殿はそれまで賢豊に掴まれていた手を振り払うと、賢豊を邪魔だと言わんばかりに押して、感動の声を上げながら呉服前が抱いている赤子の元に駆け寄った。賢豊は殿に押されよろめき加減に畳にこけると、呆れた顔を浮かべた。

「やれやれ、それでも「近江の将」ですか？」

賢豊は押された場所を摩りながら起き上ると、殿である近江の将に言った。

しかし近江の将の耳には賢豊の声は入っていなかった。赤子を夢中になり見つめ、抱きかかえて喜んでいた。その表情は、今まで数多くの戦で人を殺めてきた近江の将、六角定頼の表情とは思えないほど純粹で、幸せな表情であった。

「私の後継ぎ、「近江の将」だ！」

定頼は赤子を高く抱き上げると、高らかに宣言したのであった。

この赤子こそ、この小説の主人公となる六角義賢である。

## 三雲の思い出

呉服前は多くの侍女と共に、三雲城の中庭で茶を楽しんでいた。

「ほとんど散ってしまっただが、この城から見える景色は風流そのもののよ」

呉服前は、ほとんどの花を落とし葉桜と化した桜の木を見て言った。その言葉を聞き、周りの侍女達も桜の木を見た。

「呉服前様はこの城が本当に好きなのですね」

侍女の一人が桜の木から呉服前に視線を移し言った。

「そなた達にとってこの城は、観音寺の喧騒から逃れる城でしかないだろう。しかし私は違う。この城は特別なのだ。それもこの時期が一番特別」

呉服前は優しく、そして何かを思い出すように言葉を言った。すると、時がゆっくりと過去に戻ったような気がした。

観音寺城は六角家の本拠城であり、常に有力な国人達が集まっていた。そして「近江の将」である六角定頼が国人達と今後の方針について協議していることが多かった。その為、城内はいつも忙しい雰囲気が漂っており、女、子供にとっては居心地が悪かった。それ



に対し三雲城という城は全く逆であつた。

三雲城は観音寺城の奥城と言われ、観音寺城が危うくなった時の退却城であり、極めて重要な城であつた。しかし、退却城である為に普段は静まりかえり、落ち着いた雰囲気を漂わせていた。それゆえ、六角家の女、子供には大そう好かれていた。

その日、呉服前はまだ幼さが残る四郎を連れて、葉桜に囲まれた三雲城に来ていた。この城に來ると決まって蹴鞠をした。それも日が暮れるまで…。何故なら、普段は厳しい躰役がいる観音寺城では息抜きもままならないため、この城に來ると羽根を伸ばさずにはいられなかったからである。

「あ…！」

呉服前と四郎が蹴鞠を楽しんでいると、四郎が鞠を誤って城の斜面に落としてしまった。

「おやおや…母上が取ってきてあげましょう」

呉服前は優しく微笑むと、近くで寝入ってしまった侍女を起こすまいと、少しばかり急な斜面をゆくりと下って行つた。しばらくすると、急に呉服前の姿が消えた。まだ幼さが残る四郎は、母の姿を懸命に斜面の上から覗き込んで探した。覗き込むと意外にも母の姿は直ぐに見つかった。しかし、その姿は無残にも斜面の遥か遠くへ落下して、倒れこんでいる姿であつた。

四郎の裏返つた声で起こされた侍女達は、慌てふためいた。直ぐにでも斜面を下って助けに行こうとしたが、流石に侍女達には無理なことであつた。

一人の侍女が男を城内に呼びに行ったが、観音寺城の奥城で敵の攻撃などあり得ない場所にあるという城事情に加え、その日はほとんどの男が鷹狩りに出掛け、残っているのは老将ばかりであり、救出可能な人材は集まらなかった。

四郎は決めた。

周りの侍女が煩いほどに止めるのを無視し、まだ十歳にしかならない四郎は斜面を下り、母を助けにいった。

母の元に到着したのは、斜面を下り始めてからしばらく後のことだった。母である呉服前は気さえ失ってはいなかったが、頭からうつすら血が流れ、医術の知識がない四郎にも良くない状態であると分かった。

四郎は自分の体より大きな母の体を懸命に持ち、斜面の土に手を突っ込むようにして登り始めた。

呉服前は何度か意識が遠のきかけたが、四郎の励ましの言葉を受けないが必死に気をもっていた。

その日の夕暮、呉服前は無事に三雲城で手当てを受け、一命を取り留めた。呉服前が寝ながら横を向くと、そこには四郎も寝かされていた。四郎は斜面を半分以上上った所で力尽きてしまったが、丁度その後に若い男衆が到着し、救出されたのだった。

呉服前は思った。もし四郎が助けにきてくれなかったら、私は死んでいたかもしれない。なにせ、男衆が助けに来たのは夕暮だったから、四郎が斜面の半分以上まで連れてきてくれていなかったら、

日が落ちて私の救出は無理だっただろう…と。

「四郎は立派な「近江の将」になることでしょ」

呉服前は寝ながらぼそりと呟くと、眠りに入っていたのであった。

## 疾走【1】

天文二年、「近江の将」こと、六角定頼は自室で和菓子を食べながら気まずい息抜きをしていた。その近くでは正室の呉服前が着物を畳んでいた。

「お前様、やめなされ」

呉服前は視線を着物に向けたまま少し低い声で、呉服前に背中を向けて和菓子を頼張っている定頼に言った。定頼は先程から大量に和菓子を食べていたので、呉服前は定頼の体を気遣って言ったのだ。しかし呉服前の言葉には、もう一つの意味が含まれていた。それを定頼は分かっている為、黙って和菓子を食べ続けた。

「お前様、とりあえず食べるのをやめていただけますか？私は話したいのです」

呉服前は先程と同じ低い声で、そして先程より強めの口調で言った。

「ワシは決めたのだ」

定頼はそう言いながらしぶしぶ和菓子を食べるのをやめ、呉服前に体の正面を向けた。定頼が決めたと言うのは、四郎の元服の事だった。四郎は定頼の嫡男で、今年で十二歳になっていた。

実はこのやりとりの少し前、定頼は呉服前に四郎を元服させるという考えを伝えた。しかし呉服前は猛反対し、二人は散々に言い争い、このような気まずい空気になったのであった。

呉服前が元服に反対した理由は簡単で当然なものであった。六角家は昨年まで数々の外交作業に追われ、今年になってようやく一段落ついたばかりだった。その為、まだ完全には外交が解決されておらず、この時期に息子を元服させるのはあまりに心苦しく、余計な責任を感じはしないかという理由だった。

「まだ畿内は動乱の兆しがあるのですよ！このような時期に元服させるのはあまりに荷が重すぎます」

「それくらいのことを乗り切れないのなら、将来、立派な「近江の将」にはなれん！そなたはいつも甘いのだ！」

「こんな物を食べてるお前様の考えが甘いのです！」

二人はまた言い争いを始めた。そして、しまいには呉服前が定頼の食べていた和菓子を掴み、定頼に投げつけ部屋を去って行った。和菓子を投げつけられた定頼は和菓子の人物を中庭に蹴飛ばすと、顔を真っ赤にして部屋を出て行った。

## 疾走【2】

観音正寺。それは琵琶湖の東岸、繖山の山頂近くに位置している。伝承によれば、推古天皇、聖徳太子がこの地を訪れた際、時刻の千手観音を祀ったのに始まるという。聖徳太子はこの地を訪れた際に出会った人魚の願いにより、観音正寺を建立したという。建立理由は嘘かもしれないが、この寺が古い歴史をもっており、厳肅な寺であることは疑いようがない。

六角家の本拠、観音寺城はこの観音正寺を中心に形成されている。なぜ観音正寺を中心に城を形成したかは定かではないが、寺の歴史、厳肅な雰囲気、人々の忠誠心などを城に反映させたかったのではないだろうか。どんな理由にしろ、観音正寺は城にとって一番重要な場であった。その為、六角家の重要な取り決めなどは、観音正寺で行われることが多かった。そして今日も、重要な取り決めが観音正寺で行われようとしていた。

「四郎様、そう構えることはないですよ」

六角家の宿老である後藤賢豊は、部屋の最前列で緊張して顔が引きつっている四郎に声をかけた。

「わかっています」

四郎は詰まりそうな声で答えた。その声に賢豊は不安を覚えながらも、静かに四郎から離れた。

今日、「近江の将」こと、六角定頼の嫡男である四郎は、一二歳で元服の儀式を迎えようとしていた。その会場である観音正寺には、

六角家の家臣は勿論のこと、六角本家の者、近江の有力者、商人、村の代表、周辺諸国の者、などがひしめき合い、人が溢れそうなくらいになっていた。その中には、將軍の足利義晴の姿もあった。

「この賑わい、まさに名君「近江の将」様のお力を表しておる」

「その通り、その通り！」

「後継の「近江の将」も名君たる器の者かの」

「小さいが、なかなか落ち着きがあつて良さそうではないか？」

「いや、少し頼りない感も…」

会場内はいろいろな声が飛び交っていた。しかし最前列で緊張している四郎には、全くと言って良いほど声は聞こえていなかった。

しばらく経ち、会場から声が消えた。そして、六角定頼、呉服前、僧侶が静かに会場に入ってきた。

「では、これより儀式を始めます」

会場に儀式の始まりを告げる声が響いた。

### 疾走【3】

元服の儀式が始まってから、しばらくの時が流れた。四郎の髪は僧侶たちによって剃り落とされ、見事な大月代となった。

大月代とは月代という髪型の変形型であり、前額から頭の中央にかけて髪を剃り落としたものである。

その大月代の髪となった四郎は、元服会場の者の視線を一挙に受け、少し顔を赤らめながら視線を少し落としていた。そして四郎の前では、今まさに、六角定頼が和紙に四郎の元服名を書こうとしていた。

「では、元服者の元服名を発表いたします。元服者、ならびに会場の方々はご注目くださいませ」

定頼が和紙に元服名を書き終え、式を取り仕切っている僧侶に合図すると、僧侶が会場に響く声で言った。

「六角定頼嫡男、六角四郎の名を改め、これより六角義賢とする」

定頼は元服名を書いた和紙を広げて立ち上がると、威厳のあるはつきりとした口調で言った。四郎は黙って深く頭を下げた。それに従い、六角家の家臣等も深く頭を下げた。

「それでは義賢様、何かご挨拶を」

少し間を置き、会場の者が頭を上げてから取り仕切りの僧侶が、元服し四郎を改めた六角義賢に呟いた。義賢は誰にも気づかれない



ように深く深呼吸すると、会場の一番前を見た。先程までそこにいた定頼は既に横に退いており、主役が座る一番前の座布団には誰もいなかった。自分以外の尻は寄せ付けぬという雰囲気、主役の座る座布団から漂っていた。

義賢はゆっくりと立ち上がり、最前列から一番前に出て主役の座に座った。それまで視線は少し下へ向けていたが、主役の座に座って初めて視線をはっきりと前に向けた。主役の座からは今まで経験したことのない光景が広がっていた。自分の方へ視線が痛いほどに向けられ、視線を向ける者達全員が自分を仰いでいるように見えた。義賢は心臓が破裂する程に緊張している自分に気づいた。しかし、「近江の将」の子である以上、緊張によって恥ずかしい挨拶になつては六角家の求心力への悪影響になってしまうと考え、彼は目をつむり、母から何度も復唱させられた台詞を思い出し、ゆっくり言葉を発し始めた。

「本日、私は名を四郎から義賢に改め、元服することになった。これから六角家の将として、恥ずかしくない行動、言動に心掛ける。そして、父の天下統一事業を支えるべく、戦場を駆け走りたいと思う。ここで言う戦場とは、血を流す戦のことだけではない。政、外交、計略、全てにおいてのことを言う。私はどのようなことにおいても、戦場と考えて全力で励む覚悟だ。それには皆の力が必要不可欠だ！私を支えて、私に思いつき駆けさせてくれ！以上だ！」

義賢は最初の方こそ落ち着いた口調だったが、途中からは緊張で早口になり、最後は緊張で声が震えるのを隠すべく、大きな声で言った。終わった瞬間、自分の挨拶は上手く伝わらず失敗に終わったと思った。彼は少し視線を落として、何度も何度も頭の中で自分を罵った。

しかし彼の挨拶は失敗ではなかった。むしろ大成功であった。彼にとって大きな声を出したのは緊張を隠す為であったが、会場にいた者には遅しく、頼れるしつかりとした将の挨拶に映ったのだった。

「素晴らしい、六角家は安泰じゃ」

「二代に続いて名将「近江の将」とは…ワシは一生六角家に仕える」

「立派になられて」

義賢の挨拶を聞き終えた会場からは、称賛する声で一杯になり、拍手が煩いくらいに響き続けた。その様子を、定頼、呉服前は満足そうに見ていたのであった。

## 疾走【4】

戦国時代は当然のことながら、城主である大将のもと、家臣一同の団結力が重要であった。家臣の奉行精神を養うことは、城主をはじめ重臣たちの命題であったろう。そこで登場するのが家訓だ。その家訓の中には、就寝、起床時間を定めるものもあった。当然のことであろう。何故なら、城の者が決まった時間に登城せず、それぞれが思うままに就寝、起床していれば団結も糞もない。

戦国時代の平均的起床時間は虎の刻であったと言われている。虎の刻というのは、今の時代の時間にすると三時〜五時のことである。

元服の儀式から一夜。六角義賢は戦国武将として当たり前のように虎の刻に目覚めた。そして普段通りに着替えを済ませ、外にある水桶で顔を洗った。何もかもが普段通りであるように思えた。

「そうか、私は元服したのだ」

彼は顔を洗う水桶に映った自分を見て、普段との違いに気づいた。昨日までであった前髪はなく、羽織も一武将が着用する立派なものになっている。そして何よりの違いは、「六角義賢」という武将になったということだ。

「義賢様、殿さまが呼びです。至急、居館まで来るようにと」

義賢が水桶に映った自分を眺めていると、小姓が自分の館に入ってきて言った。義賢は水桶から小姓に視線を移すと、直ぐ行く旨を伝えて、身支度の確認をすべく自分の館へ入って行った。

登城前の時間に息子を呼び出した六角定頼は、義賢が来た時まだ酒を飲んでいた。定頼の酒の膳の向かいには、もう一つの膳があり、定頼が誰かと酒を飲んでいたことがうかがえた。

「お呼びにより参りました。何用でございますか？」

義賢は定頼の向かいの膳を横に退けて座ると、言った。

「登城前から呼び出して悪かったな。ちとお主に急な頼み事をする者がいて呼び出したんだ」

定頼は酒を盃に注ぎながら言った。

「私に頼みごと？」

義賢は不思議そうな表情をして言った。そして、座るときに横に退けたお膳を横目で見て、頼み事をした者がここに居たのだと察した。しかし、それが誰なのかは見当がつかなかった。

「そつだ。それも大物から」

定頼は盃の酒を一気に飲むと、顔を少し義賢に近づけ、微妙な笑みを浮かべて言った。

義賢は考えた。この席で父と酒を飲んでいた者ということは、自分の元服の式に出ていた者ということは確かになる。しかし、大物と言うほどの者が式に居た記憶はなく、全くといって見当がつかなかった。

「將軍、足利義晴殿だ」

定頼は義賢が考え込んでいる様子を見て、呟くように頼み事の主の名を明かした。それを聞いた義賢は、元服そうそうに大変な荷物を背負ってしまったと思い、微かな目まいを感じた。將軍の頼み事となれば、簡単なことではないと考えたからであつた。

義賢はその後、定頼から折烏帽子を貰い、將軍が本拠として利用している桑実寺まで行くように言われると、重い足取りで館を出て、観音寺城内にある桑実寺を目指して山を降りて行つた。

## 疾走【5】

將軍、足利義晴は六角義賢の元服式を見届けたあと、六角定頼の居館に足を進めながら今までのことを思い起こしていた。父である足利義澄が京を追われ、近江の六角氏に身を寄せていた時に私は生まれた。それ以来、私の人生は落ち着かぬものであった。私が誕生して間もなく父は死去、その後は近江を出て播磨の赤松義村の元で養育された。養育先での扱いも居心地の悪いものであったが、第十二代將軍になつてからはもつと居心地が悪かった。居心地が悪いというより、居場所が無かった。

しかし、生まれ故郷である近江に戻つてからは違った。私を保護してくれている六角氏、特に六角定頼は真剣に將軍である私の立場を考えてくれた。嬉しかった。初めて一人の人間として行動することを許された感じがしたからであつた。だが、定頼も心の底では私を利用しようとしていることには気づいている。それだけに、次の「近江の將」になる者を飼い馴らす必要があると考えた。次は私が人を利用する番だ。

「お待ちしておりました。さあ、さあ、お座りください」

亥の刻、定頼の居館に到着し、待ち合わせの部屋に行くと定頼が頭を下げながら出迎えた。義晴は黙って定頼の向かいの座布団に座つた。

「粗末ではございますが、今宵はごゆつくりと」

義晴が座ると、六角家の小姓が料理を乗せた膳を運んできて、自分と定頼の前に置いた。定頼は料理が置かれると、笑みを浮かべな

がら言った。

「言われなくてもゆっくりしますよ。ここは他国と違って居心地が悪くないですから」

義晴は静かに言った。

しばらくの間、二人はありきたりな会話をしながら時を過ごした。義晴はいつ本題を切り出そうか迷い、もどかしい思いで会話を続けていた。それを定頼は察したように、本題に関わる話題を投げてきた。

「義賢のこと、どのように思われましたか？」

定頼が言った。義晴は本題を切り出せると思い、少し背筋を伸ばし、目を大きくして言葉を発し始めた。

「頼もしい若者に見えました。これなら六角家は安泰、いや、我々に代わって天下の政治を取り行う勢力に成長させることでしょ」

「面白いことを言われますな。將軍様がそのようでは、幕府はますます求心力を落としてしまいますぞ」

將軍である者が、「我らに代わって天下の政治を取り行う」と言ったことに対して、定頼は大きく笑いながら言った。

義晴は定頼の笑いはただの演技に過ぎないということは分かっていた。今の六角家なら、室町幕府に代わって天下の政治を操る勢力になる可能性は十分にあると思っていたし、六角家に限らず、全国の有力大名はそれを狙っている。その上で、我ら足利に味方するよ

うに振る舞い、利用しようとしていることは、自分の今までの人生でよく分かっていることであつた。

「そうですね…このままでは求心力が落ちてしまふ。何か良い手は……」

義晴はわざとらしく考え込んだように言葉を発し、眉間にしわを寄せて目を瞑つた。そして直ぐに目を開けて、今思いついたように言つた。

「そうだ、定頼殿。義賢殿を貸して貰えませんか？」

定頼は思いがけない義晴の言葉に、あっけに取られたように黙り込んでしまつた。

「実はですね…」

義晴は黙り込んだ定頼に構わず、本題を切り出して畳みかけた。義晴は言葉を弓矢のごとく定頼に浴びせ、定頼に断る余地をなくしてしまつた。

時は子の刻になつた。「近江の将」、六角定頼を言いくるめた足利義晴は満足そうに定頼の居館を出た。外は満月に照らされた夜が広がっていた。その満月は今までの人生で見た中で一番美しく見えた。何故なのか。彼は満月をぼんやりと見ながら考えた。そして、初めて自分主導で物事を動かそうとして浮かれている自分に気づいた。

義晴は満月に照らされた山中をゆっくり歩きながら、桑実寺を目指したのであつた。



## 疾走【6】

桑実寺は観音寺城のある繖山の中腹にあり、六角義賢が元服の儀式を行った観音正寺へと登る途中に位置している。

寺伝では、天智天皇の四女、元明天皇の病氣回復を僧に祈らせたと、琵琶湖から薬師如来が君臨し元明天皇の病氣を治したという。これに感激した天智天皇はこの地に寺の創建を命じ、藤原鎌足の長男であった定恵が創建した。寺名は、定恵が唐から持ち帰った桑の実をこの地の農家で栽培し、日本で最初の養蚕を始めたことに由来する。

天文元年には、室町幕府十二代将軍、足利義晴が六角氏の保護の元に幕府をこの寺に設置した。

この桑実寺に設置された幕府は仮のものではあったが、奉公衆、奉行衆を引き連れ、僅かながら兵も置かれていたということで、本格的なものであった。

六角義賢の元服の儀式から一夜明けた日、二人の男が桑実寺の総門をくぐった。

一人は子の刻に寺に帰りついた足利義晴、もう一人は六角義賢であった。

「まるで観音寺城にもう一つ城があるようだ」

卯の刻、今まさに総門をくぐった義賢は言った。

義賢の視界には、成就坊、円照坊、地蔵堂、そして一番遠くに三重塔が見えた。桑実寺の規模は義賢の想像を超えるもので、彼はしばらく寺の規模に圧倒されて突っ立っていた。

「義賢様ですね。こちらへ」

一人の僧がどこからともなく現れ、義賢を幕府のある正覚坊へと案内した。

総門から正覚坊まではそれほど遠くはなかった。総門から直ぐに曲がると、あっという間に正覚坊に入り、気がつけば將軍が控える部屋の前に来ていた。

義賢は案内の僧に礼を言つと、頭に被っている折烏帽子を整え、ぎこちなく、將軍の控える部屋に入って行った。

「元服の儀式からまだ一夜。心落ち着かぬうちに呼び出してすまなかったの」

義賢が部屋に入り座ると、上座に座る足利義晴が声を発した。義晴の声はどこかに嬉しさを隠したような声であった。そして表情も、これから愉快なことでもあるかのようなものであった。

「いえ、元服して早速に將軍様とお話が出来るというのは…まったく嬉しいかぎりでございます」

義賢は義晴の声と表情に不気味なものを感じたが、將軍相手にどうこうできるわけではないので普通に言葉を返した。

義晴は義賢の返答を聞くと満足そうに頷き、手を羽織の内に入れ

て書状のようなものを出した。

「これが何か分かるかの？」

義晴は書状のようなものを義賢に見せるように手に持ち、言った。

「……分かりません」

義賢は少し間をおいて言った。そして少し視線を落とした。

義賢にとってこの展開は想像の範囲内であった。昨夜、父である六角定頼に呼び出され、将軍が会いたいと言っていると聞かされた時点で想像はついた。将軍がわざわざ呼び出すというのは、自分に何か仕事を与えようとしている。そして、未熟な自分を将軍が手の内に入れようとしている。ここは何とかしてそれを防がねば…

「……聞いておるのか？」

義晴が言った。その声で義賢は我に返った。

「何か考えごとか？まあ良い、そのキレる頭で存分に疾走してくれ」

義晴は続けて言うと、皮肉な笑みを浮かべて退室して行った。

義賢はしまったと思った。心の内で考え込んでいるうちに、義晴の言葉をすっかり聞き逃してしまった。しかも自分の目の前には、先程、義晴が持っていた書状のようなものが置いてあり、すっかり仕事を与えられてしまっていた。

「これを細川晴元殿に届けるようにと。その紙には本願寺討伐令が

入っているそうです」

横に控えていた幼い小姓が言った。

それから義賢は討伐令を届ける仕事の説明を受け、どうでもよい土産を寺の者から受け取らされた後、重い足取りで桑実寺の総門をくぐった。

時は辰の刻になっていた。太陽が昇り、世ではこれから一日が本格的に始まろうとしていた。しかし、義賢の心は既に夕暮状態であった。

「まだまだ…これから」

義賢は將軍の手の中に乗りかかりかけている自分を励ますように言っと、何か挽回する手立てがないか考えながら観音寺城へと歩いて行った。

## 疾走【7】

戦国時代。この時代の始まりについて、正確で具体的な年代、事例は述べられない。一般的には明応の政変、あるいは応仁の乱と言われているが、それは広義の範囲で捉えた考え方であり、とても正確なものとは作者は思えない。しかし、この時代が何処から始まったかということに関しては、いつ戦国時代が始まろうと畿内であつたと作者は思っている。

享禄から天文にかけて畿内は、戦国時代の始まりから治まらぬ治安がさらに深刻化し、戦国の世の模範とも言える動乱の渦の中にあつた。

享禄四年、細川晴元と細川高国の長年の争いが「大物崩れ」と呼ばれる天王寺の戦いで決着、それまで晴元派、高国派と別れていた畿内の権力構造は高国の敗北で晴元に移り、ようやくまとまったかに思われた。しかし今度は細川晴元が権力を一手に握ろうとしたことに対し、晴元側であつた三好元長が不満を募らせ、また、元長を邪魔者と見る者達が晴元のもとに集まるなど、再び畿内の権力構造は乱れようとしていた。

細川晴元と三好元長という元々は味方同士であつた者の対立が鮮明になる中、この対立に追い打ちをかける出来事が起きた。河内国の守護、畠山義堯の配下にあつた木沢長政という者が、細川晴元に内応するという計画が畠山義堯に露見、激怒した義堯は木沢長政討伐に乗り出したのであつた。この段階ではそれほど細川晴元と三好元長の対立に影響を与えていなかったのだが、畠山義堯に三好元長が加担し、二人の対立に大きな影響を与えたのであつた。

天文元年、細川晴元と三好元長の対立は飯盛城の戦いで決着、元長、義堯の二人が討たれ、晴元の勝利となった。勝因は細川晴元が三好元長が肩入れする法華宗の対立宗派の根拠地である山科本願寺を味方につけ、山科本願寺を中心とした大規模一揆軍を三好元長攻めに利用できたことにある。

畿内で細川晴元に対立する勢力が敗れた為、今度こそ畿内の動乱は治まるかに思われた。しかし今回も治まることはなかった。細川晴元の勝利に貢献した山科本願寺一揆軍、いわゆる一向一揆軍は収まる兆しを見せず、大和国へ侵攻、そこで本願寺ゆかりの寺までも襲撃し、一揆を呼び掛けた山科本願寺でさえも止めることは出来なくなってしまったのである。これには細川晴元も驚き、管領の立場から本願寺との決別、一向一揆鎮圧を決意したのであった。

細川晴元の本願寺決別を知った山科本願寺の事実上最高指導者、蓮淳は一向一揆の行動を認めると共に、晴元攻撃に動き出したのであった。しかし細川方に近江の将、六角定頼や法華一揆が加担し、圧倒的な兵力で山科本願寺を焼討にされてしまったのだった。

山科本願寺を焼討にされると、本願寺法主の証如は石山御坊を石山本願寺と改めて抵抗を続けた。しかし直ぐに、細川、六角、法華一揆軍に包囲された。

天文二年、石山本願寺の堅い守りを活かし、本願寺勢力は抵抗を続けていた。そこに、細川晴元に恨みを抱く勢力が拳兵、本願寺を包囲している軍は一時包囲を解き、敵の攻撃に備えたのであった。

將軍、足利義晴より本願寺討伐令を預かった六角義賢は、観音寺城のある一室で、父であり近江の将である六角定頼からこれまでの畿内動乱について大まかな説明を受けていた。

「…ということじゃ」

定頼は長い長い畿内動乱の説明を言い終え、軽く溜息をついた。

「なるほど、あまり関わりたくない問題ですね」

義賢は冴えない表情で言った。

「全くそつだ。晴元にそそのかされて本願寺に手を出したのが間違  
ிட்ட」

義賢の言葉に定頼は深く後悔するように言った。そして続けて言  
った。

「義賢、もう首を突っ込んだら退くに退けん。六角家は畿内動乱を  
上手く利用し、成長していくのみだ」

定頼は言い終わると勢いよく立ちあがり、部屋から出て行った。

部屋に一人残された義賢は、懷から將軍より預かった討伐令を出  
してしばらくそれを眺めた。この討伐令を届けるだけで事が終わっ  
てくれれば良いと思うと、討伐令を懷に戻して部屋を出たのであっ  
た。

## 疾走【8】

天文二年、六月上旬。全国は梅雨に入り長雨が続いていた。この時代、大した整備もされていない街道は泥濘<sup>ぬかるみ</sup>、海、川、湖は水位を高めて荒れ、旅人や商人の足を遅らせていた。春から夏の間におけるこの季節は、徒歩が交通手段の主を占めるこの時代にとって、人々の生活を停滞させるものであっただろう。人々は梅雨が終わるのを待ち、暑い暑い夏が来てようやく動き始めるのだ。したがってこの季節は人気も疎<sup>ひとけ</sup>らで、どこか寂しい雰囲気<sup>ひとけ</sup>が全国に広がっていたことが想像できる。

近江坂本、普段は琵琶湖の湖上交易で賑わうこの地も、梅雨の影響を受けて寂しい雰囲気<sup>ひとけ</sup>が広がっていた。多種多様な物品が並び、商人、旅人の声で賑わう湖岸は人気も疎<sup>ひとけ</sup>らで、荷夫が落ち着きなく歩いていた街道には托鉢僧侶がぼつりぼつりと立っているだけであった。

そんな近江坂本を六角義賢と従者の男一人は雨のなか山城国方面へと歩いていった。

「義賢様、そろそろ宿を選びてこの地で泊まりませぬか。遠くで雷鳴も鳴っておるようですし」

義賢の後ろを歩く従者の男が立ち止り、先を歩く義賢の背中に言った。

「ただでさえ遅れているんですよ、もう少し進んでから泊るべきと思うが」



義賢は振り返り立ち止ると、落ち着きなく従者の男に言った。

義賢は焦っていた。観音寺城を出発して早数日、梅雨の長雨による影響でなかなか先に進めず、未だに山城国にすら達していないという状況は、早く成果を上げたいという元服したばかりの義賢には堪えていた。

「外交とは急いで良い結果が出るとは限りませんよ。さあ、明日、天気が良くなることを祈って、今日はあそこで泊りましょう」

従者の男は雨が降ってくる空を少し見上げてから義賢を見ると諭すように言った。そして前方に見える宿を指さすと、義賢の前方に出て歩きだした。

この従者の男の名は進藤貞治。六角氏に仕える重臣で、同じ重臣の後藤氏とともに「六角氏の両藤」と呼ばれ、六角家臣団の中でもひととき発言力を持っていた。特に貞治は外交で手腕を発揮し、数々の六角外交を支えてきた実績を持っていた。その為、本願寺討伐令を届けることになった元服して間もない未熟な義賢に、外交の得意な貞治が従者として就くことになったのだった。

義賢は先に進みたい気持ちで一杯だったが、貞治が言い返す暇も与えてくれない早さで自分の前に出て、宿に向けて歩きだしたので仕方なくそれに従った。

「な、何奴」

義賢が貞治の後ろを歩き始めて直ぐ、前を歩く貞治が声を上げた。それまで自分達の進む街道には托鉢僧侶がぼつりぼつりとしかなかったのが、今は貞治の前に進路を塞ぐようにして複数の僧兵が立

ちはだかっていた。義賢は既に刀に手を掛けて戦闘態勢に入っている貞治を見て、自らも刀に手をかけた。今まで剣術の稽古は受けてきたが、初陣を経験していない義賢にとっては初めての戦闘であった。しかし、突然の出来事の為か、恐怖心というものは義賢には湧いてこなかった。

「突然のご無礼をお許しください。『近江の将』の嫡男、六角義賢様とお見受けします」

義賢が貞治に近づき、共に刀に手をかけて前方の僧兵と睨みあっている、突如、後ろから声がした。義賢と貞治は慌てて後ろを振り返ると、いつの間にか後ろにも僧兵がおり、僧兵の頭と思われる大柄な僧兵が近づきながら声を発したことが分かった。同時に既に義賢と貞治は僧兵に取り囲まれており、抵抗しようにも出来ない状況であることも分かった。

「何奴じゃ、そして何の用だと言うのじゃ」

貞治は諦めたかのように刀から手を放すと、身体全体を声を発した僧兵の頭と思われる者に向け言った。そして義賢も刀から手を放した。

「否定されないということは間違いないですね。我らは比叡山延暦寺の僧兵にございます。六角義賢様がこの道を通られるという情報を得まして、待ち構えていた次第でございます。決して、悪いようにはいたしません。少しお話したいことがありますので、どうかご同行を…」

僧兵の頭と思われる者は義賢と貞治に敵対する意思がない旨を伝え、二人に同行を求めた。しかしその者は丁寧にこそ言っているが、

義賢と貞治を僧兵の包囲から解くことはなく、断るという選択肢はないということを間接的に伝えていた。

「仕方ありませんな…」

貞治は義賢の方を見て言った。

「行くとしましょう。それしか選択肢はないのですから」

義賢が静かに言うと、僧兵の頭と思われる者は作ったような笑みを見せ、二人を比叡山方面へ向けて連れ出すのであった。

## 疾走【9】

湿った風が布団から出ている顔と足に当たっている。微かに雨音が聞こえる。目は瞑ったままだが、まだ十分に夜の暗さと分かる。丑の刻あたりだろうか…。まだ眠れる、眠っていたい。しかし布団から出ている身体の部分にあたる風、聞こえてくる雨音は何だろう。いくらこの館が古いといっても、この風の当たり方と雨音は普通ではない。戸が壊れたか…。それとも泥棒か…。

第百六十二代天台座主、妙法院覚胤法親王、略して覚胤はそんなことを思いながら目を開けた。そして身体は起こさず、首は静止させたまま視線を左右に送った。異常はない。次に風が吹いてきたらしい足元の方を見るべく、ゆっくりと身体を起こした。すると開いた戸と灯り火を持って戸の外側に突っ立っている男が目に入った。

「こんな時間にどうした、なんぞ起こったか？」

覚胤は突っ立っている男が顔見知りであることに気づくと、少し安心した表情を浮かべて言った。

「夜更けに申し訳ありません。朝を待つて報告にと思いましたが、思ったより早くこの辺りを通過するそうで…座主様の許可を頂いてからしか動けませんゆえ、こうして参りました」

灯り火を持った男はそう言うと、戸の外側から内側へと足を進め、開けたままの戸を閉めその場に座り込んだ。

天台座主とは比叡山延暦寺の住職で、「山の座主」と呼ばれる通り、比叡山延暦寺を一手に仕切る者のことである。山の座主と言う

からには常に比叡山に留まっているというイメージが湧きやすいが、実際には違い、重要なことが比叡山で行われない限りは入山せずに別の場所に住んでいるという座主が多かった。この覚胤もその一人で、比叡山ではなく、その麓に館を構えて生活をしていた。

「あの噂は本当だったか：ならば見つけ次第に連れてまいれ」

覚胤は男の言葉を受けてから何度か小さく頷き、言葉を返した。

「分かりました。しかし上手くいくでしょうか？」

男は覚胤が事の許可を下すのを予測していたかのように直ぐ答えると、少し身体を覚胤に近づけた。

覚胤は男の問いに対し少し喉を唸らせると、視線を男から少し外して黙り込んだ。そして現在の畿内情勢を頭の中に思い浮かべた。まず近江では幕府と「近江の将」こと六角定頼が勢力を展開しているが、この両者は良好な関係であると言え、今後、両者の争いがあるとは考えにくい。次に山城であるが、こちらでは目障りな日蓮宗が法華宗と名乗り、山城の警衛権などを得て好き放題にやっている。その上、細川、六角に協力して本願寺を包囲、さらなる権力上昇を狙っていると聞く。このままでは日蓮宗の権力が上昇を続け、仕舞いには諸大名と結んで我が天台を攻撃するという事態も現実的になってくる…。

覚胤はそこまで思い浮かべると、日蓮宗に対する恐怖心と敵対心が自分の中にあることを改めて実感した。そして同時に、必ず日蓮宗への対策を打たねばならないということも改めて実感した。

「近江の将」、この言葉は六角氏の当主を示すと同時に、近江に

おける一大勢力の持ち主であるということも示している。その「近江の将」を味方につけておけば、これ以上の日蓮宗への備えはない。だから比叡山としては今回の噂は真実でなければならぬし、作戦も必ず成功させなければならぬ。今と未来の「近江の将」を味方につける為に…！

「上手くいく、上手くいかねばならん、多少の手荒い方法を使ってもな」

覚胤は男に力のこもった声で言うと、目と顔で男に退室を促した。男は黙って頭を下げると、静かに覚胤の館から姿を消した。

男が姿を消したのを確認すると、覚胤は再び横になり、雨音に耳を傾けながら眠りに入っていくのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7629m/>

---

近江の将

2011年6月6日22時26分発行